國語

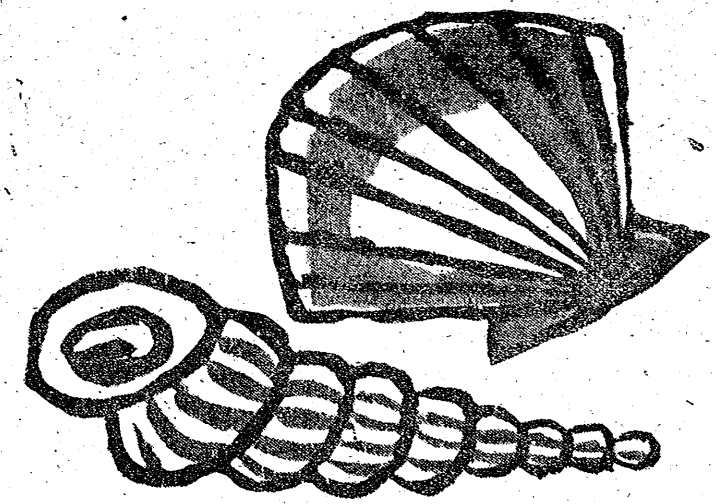
第六学年　中

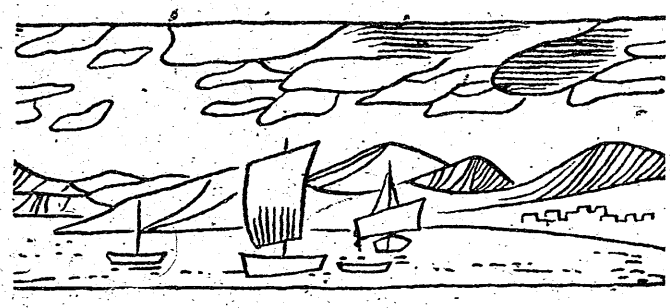
K160.8
1
14

國語

國立教育研究所
附屬
教育圖書館藏書

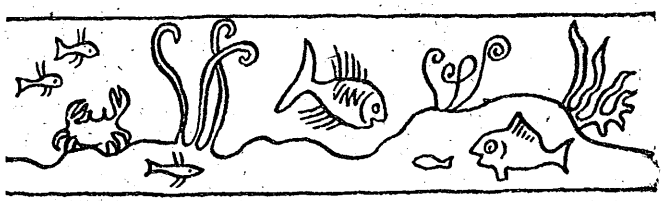
中學年

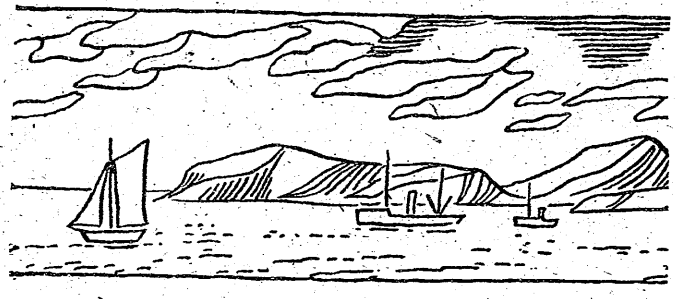




もくろく

一　おかあさん……四
二　外國からきたことば……十八
三　星の光……二十九
四　夜明け……三十八
五　心に太陽をもて……四十二
　　心に太陽をもて





　　くちびるに歌をもて
六　とりいれまつりの夜……五十一
七　茶わんの湯……六十二
八　木もと竹うら……七十七
　　（一）
　　（二）
九　雪の映画……八十三
十　マッチ賣りのむすめ……九十

一　おかあさん

世界の名高い文学者で、その名のわが國に知られている人は、けっして少なくはありません。けれども、フランスのルイ・フィリップの名は、すこしちがった特別なひびきをもって、私たちの心をうつのです。なぜでしょう。それは、フィリップの作品の中にみなぎっている大きな愛の氣持、そこからさしてくるとうとい光のためなのです。フィリップは、ますしいもの、苦しんでいるもの、ふしあわせなものの中に、かえって、人間としての心のとうとさをみつけたのです。そうして、心の正しい人々の苦しみを、自分もともに苦しんだ

のです。だから、フィリップの作品の中には、たしかに、私たちを心のそこから動かし、私たち自身の生活を思わずふり返らせないではいない強い眞実の力が、こもっているのです。

それというのも、フィリップ自身、中部フランスの小さな町のまずしい木ぐつしの子に生まれ、おさないころから、人の世の苦しみをいろいろとなめていたからのことでした。しかし、フィリップのすなおな心は、まずしさのために、すこしもゆがめられたりはしませんでした。

こうしたフィリップの純眞さ、誠実さ、それは、かれが、父を失った直後、文学修業のためにパリーに出て、市役所のガス係という職についたとき、ふるさとにのこした母へ送っ

たつぎの手紙の中にもよくうかがわれます。老いた母を思う子の眞情は、遠く海をこえて、私たちの胸にまでせまってくるではありませんか。

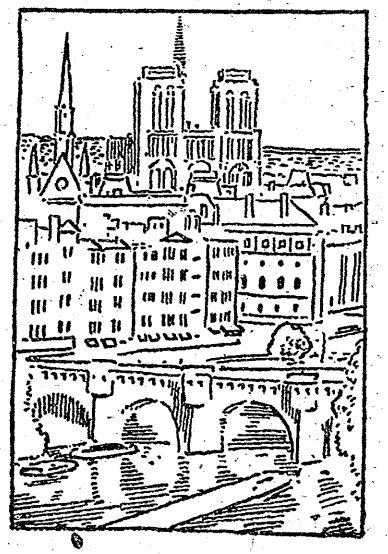
○

パリー、千九百七年四月十日

おかあさんとちょっとお話をしようと思います。私は短い旅をしたあとで、七時にパリーに着きました。たって以來、一分間も、おかあさんのことを考えないではいられませんでした。

なつかしいおかあさん、おわかれしてから私がいちばんつらかったことは、おかあさんがかなしがっていらっしゃると思うことでした。

子どもたちのことをお考えになってください。そうして、ご自分にはまだ子どもたちがのこっている、子どもたちはじゅうぶん愛していてくれる、だから、自分はたしかにひとりぼっちではないのだと、お考えになってください。どうしても一どはおこらなければならないことが、おこったというにすぎないのです。私たちは、おとうさんのために、心からの思い出をまもることにしましょう。おとうさんのご一生は、私たちにとっての手本になってくれるでしょう。おとうさんのお写眞を、私は、いつも自分のそ



ばのつくえの上におきます。一生の間、いくたびとなく、おとうさんのおことばを思いだすことにします。それは私にとって、このうえもないたいせつなことばです。が、おかあさん、運命にはしたがわなければなりません。じゅみょうにも負けなければなりません。なにしろ、私たちよりふかいものなんですから。

私には決心がつきました。つらいのをがまんして生きていきます。どうしてもなれることのできないことがあるとしたら、それは、おかあさんがかなしがっていらっしゃるということです。なにも、勇氣をだしてわすれてしまおうとお思いになるにはおよびません。なにしろ、おかあさんにしても、私にしても、とてもわすれることのできないのは、わかりきっているのですから。けれども、力をだしてしごとのことをお考えになるので

す。おかあさんの生活や、私たちの生活のことをお考えになって、この世の中には、まだ幸福がのこっている、なぜかといえば、妹にしても、私にしても、心からおかあさんを愛しているからだと、こうお考えにならなければいけません。

おかあさん、いま、おかあさんが力をおとしておしまいになったら、あなたのルイは、たいへんかなしい思いをしなければなりません。かなしみのために、おからだをおいためになるなんて、どうあっても考えのたりないことです。

私は、おかあさんが、ちゃんとしていてくださって、どっちみちさけることのできなかったことに対して、しっかりしたかくごをおきめになり、自分を愛してくれる子どもたちのことを思って、安らかに生きていてくださるのだと、思いたいのです。

ランプとコーヒー入れとは、あす、送らせます。ランプについては、いろいろいいことを教えてくれました。くぎへかけるようにしたほうがいいとか、調節ができるとか、ほのおがゆれたりしないとか、光をずっとやわらかくするために小さなかさがあるとか――それには、つかいかたを書いた小さな書きつけがついているはずです。よく説明しておもらいになるといいと思います。ちっともむずかしいことはありません。いたってべんりにできています。

では、おかあさん、さようなら。少なくとも、一週間ごとにお手紙をさしあげましょう。それほど、たえずおかあさんのことを思っているのです。じきに九月になります。そうしたら、

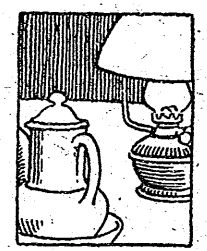
おそばに行けます。さようなら。

あなたのルイから

パリー、千九百七年四月十一日

○

おかあさん、いま、ランプとコーヒー入れとを送らせました。

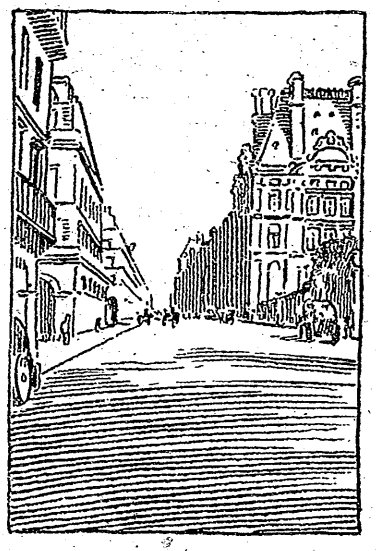


このランプは、石油でもきはつ油でも、どちらをおつかいになってもかまいません。が、きはつ油をおつかいになったほうがいいのです。ランプはかべにおかけなさい。きはつ油のさしかたは、ご自分でなさってごらんなさい。調子をととのえるには、どうをあちらこちらにまわすのです。いっしょに小さなかさを送りました。たぶん、とちゅうでこわれるだろうというこ

とでしたが、もしこわれたら、そちらでわけなくかわりをお見つけになれるでしょう。それに、ランプは、かさなしでもりっぱに役にたちます。かさは、光をへいきんさせ、もっとやわらかくするためなのです。

これは、私の友だちで、母親が十年このかた、この式のランプをつかっているというのが教えてくれたことなのです。その友だちの母親は、このランプに満足しきっているそうです。

小包二つは、おそらくいっしょには着きますまい。コー



ヒー入れは、中に小さなめもりのようなものがついていて、どこまでコーヒーを入れていいのか、おわかりになります。それに、小さなさらがあります。それは、コップの上からコーヒーこしをとったとき、それをのせるためなのです。

おかあさんのことを思っております。夜をどうしてすごしておいでしょうか、お知らせください。もうじきお目にかかれます。あなたを思うすべての心をかたむけて、さようなら。

ルイ

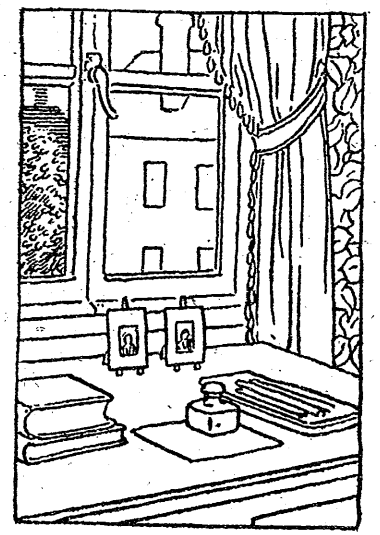
○

パリー、千九百七年四月十六日

おかあさんのことを思っています。あなたがたおふたりの写眞は、いま、この手紙を書いているつくえの上、私の前におい

てあります。おとうさんに対しては、このうえなくまゆやかな、このうえもなく純眞な思い出がのこっています。

おとうさんのお写眞は、ほんとうに生き写して、生きておいでになったときそのままです。そうして、おかあさん、あなたのことを思うとき、「おかあさんと私とは、おたがいに、それほどはなれてはいないのだ、もうすこしすれば、ごいっしょに一月をくらせるのだ、自分としては、力のかぎりおかあさんを幸福にしておあげしよう。」と、こんなことが思われてくるのです。



おかあさんが、もし、かなしいお氣持になられたときには、自分には子どもがあるということをお考えになって、力をとりなおしてくださるようにといのっています。

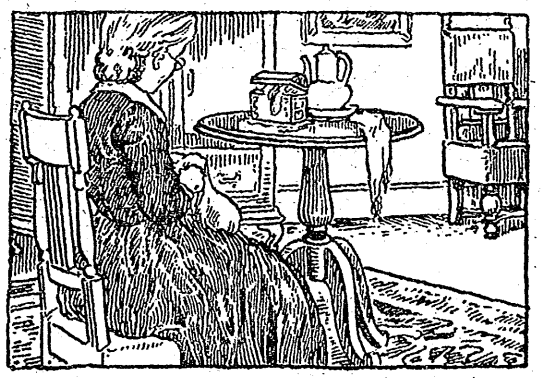
おかあさんがご用でしたら、いつでもとんで行きます。おかあさんのおやさしさこそ、私にとっては、いちばんとうとい宝なのです。

おとうさんのおはかについては、どうしたものか、ちょっと私にはわかりかねます。が、おかあさんのおすきなようになさってください。

おかあさん、これからたびたび手紙をあげることにしましょう。そうすれば、おあいしに行く日のくるまで、いままでより時間が早くたつてしょうから。たとい、からだはこちらにいて

も、このまごころを書いてお送りして、せめてものおなぐさめにしたいと思っています。私がそばにいないことなど、すっかりおわすれ願いましょう。いつもこう思っていてください。あなたが私を思ってくださるとき、私もおかあさんのことを思っていると。

ランプがお氣にいって、うれしく思いました。すこしこみいりすぎているとお考えではないかと心配していました。パリにある、なにかそういったものがご入用のときは、ごえんりょなくおっしゃってください。

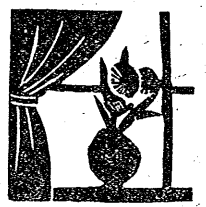


夜が長すぎはしませんか。おひとりでさびしすぎるとは、お思いになりませんか。

どんなにしていらっしゃいますか、お知らせください。私には、おかあさんのおすがたが、目に見えるような氣がします。どの時間になにをしていらっしゃるか、この私にはわかるのです。

では、おかあさん、さようなら。きょうはこれでお話をやめます。が、近いうちにまたはじめましょう。さようなら。

あなたのルイ



二　外國からきたことば

学校で、そうじをしているとき、高山くんが、思いだしたように、

「バケツは、もとは英語だってね。ゆうべ、にいさんに聞いたよ。」

といった。

すると、窓ガラスをふいていた田中さんが、

「カーテンも英語じゃないかしら。」

といった。

これを聞いていた野村さんが、

「では、バケツやカーテンなどは、日本語で、なんといっていたんでしょう。」

とたずねた。

「さあ。」

田中さんが答えられないでいると、高山くんが、

「カーテンは、まどかけさ。」

「では、バケツは。」

「バケツはね、手おけさ。」

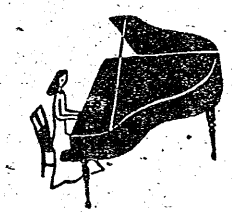
「手おけ、手おけはちょっとおかしいわね。」

「それではなんだろう。」

「さあ。」

そこへ先生がいらっしゃった。みんなの話をお聞きになって、

「そうか。そうじがすんだら、そのことについて話をしよう」。
とおっしゃった。
それで、みんなは急いでそうじをすませた。
みんなが席につくと、先生は、私たちのつかっていることばの中で、外國からはいってきたことばが、いろいろまじっていることをくわしく話してくださった。
そうして、つぎのようなことばはその一例だとおっしゃって、こくばんにお書きになった。



「クレヨン、ペン、ナイフ、ゴム、ランドセル、ピアノ、オルガン、バイオリン、ハーモニカ、シャツ、ボタン、ポケット、ズボン、オーバー」。
「ずいぶんあるなあ」。

といって、みんながおどろいていたが、先生は、つぎつぎと書き続けられた。
「ミルク、コーヒー、ジャム、トマト、キャベツ、バス、トラック、オートバイ、リヤカー、ハンドル」。
みんなは、「ほう」。とか、「あれもそうか」。とかいいながら、先生のお書きになる文字に目をそそいだ。
先生は、そんなことにはおかまいなしに、どんどんお続けになった。
「ボール、テニス、ピンポン、ラケット、スキー、ラジオ、ニュース、レコード、チフス、コレラ、マラリア、トラホーム、アルコール、ガーゼ」。
とうとう、こくばんがいっぱいになってしまった。

「へえ」。

私たちは、あまり多いのにおどろいた。

佐藤さんが、

「先生、私は、これはみんな、日本語だとばかり思っていました」。

と、さもふしぎそうにいうと、先生は、

「いや、いまは日本語にちがいないが、もとは、外國のことばさ。それが長い間つかっているうちに、すっかりなれてしまって、日本語になったと考えていいだろう」。

とおっしゃった。それから、タバコ、キセル、カルタ、カボチャも、外國語であったとお話しになったので、私たちは、いよいよおどろいた。

先生が、

「それでは、これらのことばは、もとはどこの國のことばだったのだろう」。

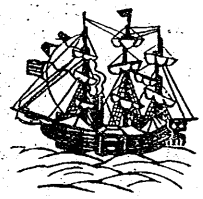
とおっしゃったので、みんなは口々に、

「英語です」。

と、そくざに答えた。すると先生は、

「外國からはいってきたことばは、英語だけではなく、ほかの國からも、いろいろはいってきている。たとえば、ここにあげたことばの中でも、クレヨン、ズボンはフランス語、ゴム、ランドセル、コーヒー、コレラ、アルコールはオランダ語、チフス、トラホーム、ガーゼ、スキーはドイツ語。それから、タバコ、カルタは

ポルトガル語、キセルとカボチャはカンボジア語だといわれている。そのほかのことばは、みんな英語だ。



先生のお話を聞いているうちに、私は、どうしてこんなにたくさんのことばが、いろいろな國からはいってきて、日本語になったのだろうかと、ふしぎになってきた。それで、私は、

「先生、どうして、そんなにたくさんの外國のことばが、日本語になったのでしょう。」

とおたずねした。

それは、外國と交通をして、日本になかった品物が、外國から傳えられたときに、そのことばもいっしょにはいってきたので、たとえば、ラジオといっしょに、「ラジオ」ということばがは

いり、タバコとともに、「タバコ」ということばが、傳えられたということがわかった。

私は、このお話から、さまざまなことが心にうかんできた。ものとことばが、いっしょになっているということは、あたりまえのことだが、なかなかおもしろいと思った。

だから、これからのちも、新しいものが世の中にできてくると、ことばも、それにつれて、新しく生まれるものであることが、考えられる。「ことばのおたんじょう」などというお話が、つくれそうな氣がしてきた。

それから、外國のことばがはいってきたのは、品物からだけではなく、外國の学問などが傳わってきたときに、そのことばもいっしょに傳わってきたのにちがいない。そうしてみると、

このあいだ、先生から、日本にはいってきた西洋医学は、はじめオランダからはいり、そののちはドイツ医学がおもに傳わったとうかがったが、このことから考えあわせてみると、コレラは、オランダ医学がはいってきたときに、また、チフスやトラホームは、ドイツ医学がはいってきたときにそれぞれ傳わったことばであろう。

また、音樂の時間によくつかう、リズムとか、ハーモニーとか、そのほか、コーラスとか、ソナタとかいうことばは、西洋音樂がはいってきたときに、いっしょに傳わってきたことばであろう。また、図画工作の時間によくいう、デッサンとか、モデルとか、バックとかいうことばも、西洋の油絵がはいってき

たときに傳わってきたのだということが想像される。

それから、ふと、古くから日本といちばん関係のふかかった大陸からは、どんなことばがはいってきたのだろうかと思った。それで、先生にそのことをおたずねすると、先生は、

「たとえば、『漢語をつかう。』などというときの漢語は、たいてい大陸からきたことばだ。それが、あまり古い時代にはいってきて、長いあいだつかっているうちに、もともとからの日本語のように思われてきたのだ。」

とおっしゃった。

私は、自由研究で、外國からきたことばの中で、西洋からきたことばをできるだけたくさん調べてみたいと思った。そこで、

「どうすれば、外國からきたことばが調べられますか。」

とおたずねした。

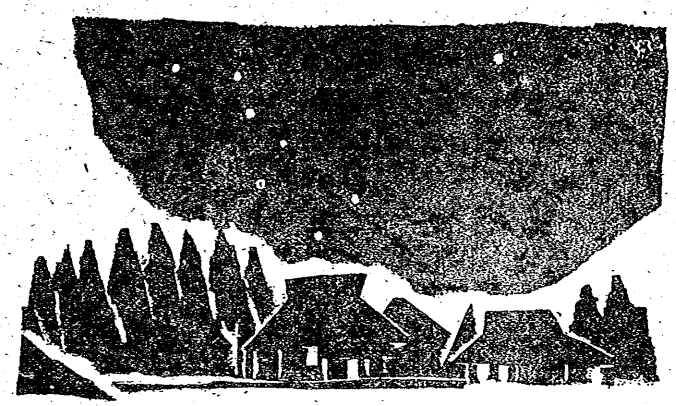
「それは、國語辞典をひいてみると、だいたいわかる。その中で、かたかなで書いてあることばは、たいてい西洋からきたことばと思っていい。たくさん出てくるよ。それから、外來語辞典というものもあるから、それを調べると、なおいっそうよくわかるだろう」。

私は、なにか大きな楽しみをもったような氣持になって、家に帰ってきた。

三　星の光

あなたがたに見てもらいたいものがあるのです。見てもらいたいなどというと、どこかにしまってあるもののように聞えるかもしれませんが、これはけっしてそういうものではありません。だれでも、どこからでも、自由に見られるものなのです。それは、空にかがやいている星です。

どうも日本人は、むかしから、あまり星に親しみをもっていなかったようです。ですから、星のおとぎ話は、日本にはあまりありません。日本は景色のよい國で、花がたえずさいていたために、天上の花を見ようとはしなかったのだろうという人も



ありますが、それぱかりとも思われません。かりにそれがほんとうのことだとしても、自分の身近なもの、しか見ないで、遠いもの、大きなものに心をくばることがたりなかったのは、ざんねんなことだと思います。小さな島國に住んでいたために、氣持までちっぽけなものになってしまったのでしょうか。むかしのことはしばらくおき、これからの人の心がまえは、大きくなくてはいけません。なんでも日本、日本と、日本だけが特別

の國でもあるかのように考えて、世界全体を見わたすことをわすれていたのは、よくないことでした。そういうちっぽけな考えでは、とても世界の中にはたっていけません。あなたがたは、これからの日本にとって、だいじなかたがたです。あなたがたの考えひとつで、日本はよくもわるくもなるのです。あなたがたのものを見る目、ものを考える力が大きくなっていけば、日本は、見ちがえるほどりっぱな國になっていくのです。

さて、私は、あなたがたに星を見るようにすすめましたが、中には、「星を見たってなにになる」。という人があるかもしれません。天上の星とあなたがたとは、あまりにかけはなれているために、自分たちとはえんがないと思っている人もあるでしょう。けれども、星をこまかく観察したことから、農業が進歩したのです。こよみが作られたのです。天文学が生まれたのです。数学が発達したのです。航海術がさかんになったのです。宗教も、科学も、哲学も、ふかまっていったのです。よそ目には、星と人間とは、たいして関係がなさそうですが、じつは、ふかいつながりがあるのです。人間は、星によってみちびかれ、星によって生きているといってもいいすぎではありません。

みなさんは、地球や金星などのわく星が、太陽を中心として

回轉していることを知っています。この一むれの星を、ふつう太陽系とよんでいます。しかし、この太陽系は、ぎんが系といわれる星の大きな集まりの一部分にしかすぎないのです。このぎんが系というのは、地球をとりまいている天の川の内がわにあるたくさんの星のむれなのです。それでは、このぎんが系全体が、星の世界の全部かというと、なかなかそうではありません。あ

のぎんが系に負けないほど大きな星の世界が、なおいくつかあるのです。

こうなってくると、うちゅうというものは、どこまで廣いのか、想像がつきません。しかし、アインシュタイン博士の話によると、うちゅうは、けっしてはてしのないものではありません。博士の計算では、うちゅうのさしわたしは、およそ二十億光年ということです。二十億光年――わかりますか。光が一方のはしから、向こうのはしまでとどくのに、二十億年も、かかるほどの廣さなのです。

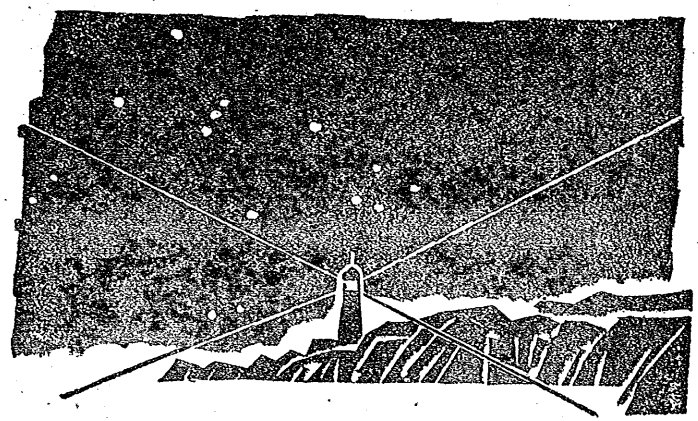
この廣大なうちゅうにくらべては、太陽もごく小さなものです。地球などになると、なおさら、ごくごく小さなものです。したがって、その地球の上に住んでいる人間などは、バクテリ

アよりも、もっともっと小さなものに感じられるかもしれません。大うちゅうから見たら、たしかに、人間は、バクテリアにもおとるほどの小さなものでしょう。しかし、それだからといって、すこしもかなしむことはありません。そのバクテリアにもおとる小さな人間が、引力の法則を発見したり、うちゅうの大きさを計算したりするではありませんか。これを思えば、人間の力というものは、うちゅうにも負けないくらい廣大で、すばらしいものだということができるでしょう。

みなさん、ごらんなさい、あの天上の星を。まあ、なんというしずけさでしょう。なんという美しさでしょう。なんというおごそかなすがたでしょう。じいっと大空の星をながめていると、はてしのない、遠い世界にひきこまれるような氣がします。

まことに、星の光は、声のないことばです。ことばのない詩です。教えを説かない教えです。むかしから、すぐれた人たちは、星の光の中からふかい思想を読みとりました。さまざまな術を発達させました。

聞くところによると、キューリー夫人は、まずしい学生であったとき、物理の時間に、先生から、星をつかめといわれ、そのことばにふかい感動を受けたということです。夫人は、星はつかまなかったのですが、その



感動から研究を進めて、ついにラジウムを発見したのです。

みなさん、あなたがたは、いま、日々の生活にもつらい思いをしていますが、そんなことにへこたれてはいけません。ひくつになってはいけません。心を大きくもってください。世界全体を、人類全体を、そうして、うちゅう全体をながめわたす大きな目をもってください。そうすれば、人間がだいいちにしなければならないことは、なんであるかということも、しぜんにわかってくるはずです。もし、くしゃくしゃするようなことがあったら、どうか天上の星を見あげてください。星は、きっと、あなたがたに力をあたえてくれるにちがいありません。

四　夜明け

一の人「音がする。ああ、いい音がする」。
　みんな「一の人」の見ている方を遠く見つめる。
「ああ、聞える、夜明けの音樂が聞える」。
二の人　そのままのかっこうで、「聞える、わたしにも聞える」
三の人「明かるいひびき」。
一の人　立ちあがって、「夜が明ける」。
二の人「東の空が明かるくなってくる」。
三の人「朝が近づく」。
みんな「夜明けの足音、しずかな夜明け」。

四の人「暗いとばりが、たち切られる」。
五の人「ゆめがさめた。長いゆめがさめた」。
三の人「夜が明ける」。
みんな「みんなの朝がくる」。
一の人「わたしたちの、樂しい朝がくる」。
五の人「深呼吸をしよう」。
　みんな氣持よく、のびのびと深呼吸をする。

一の人「なんとさわやかな夜明けだろう」。
二の人　はるか遠くの方を指さして、「光、光だ」。
四の人「光だ」。
三の人「希望の光」。

五の人「喜びの光。
四の人「きれいな、きれいな雲ではないか。
二の人「大空がほおえんでいる。ばら色にわらっている。」
三の人「おおらかな朝。」
みんな「おごそかな朝。」

一の人「日本の朝。
二の人「わたしたちの朝だ。
三の人「新しい世界のおとずれ。」
四の人「わがわかしい世紀のひびき。」
五の人「平和と自由の光がさしてくる。」

みんな「平和と自由。」
一の人「友よ、友よ。この美しい朝をむかえよう。」
二の人「この光を全身にあびよう。」
三の人「喜びにみちてかがやく光。」

みんな、かたまって、「朝日が、朝日がのぼる。」
二の人「朝風がふいてきた。」
一の人「山もはっきり見えてきた。」
三の人「わたしたちの前に、朝がきた。」
一の人「みんな、両手をのばせ。」
みんな「胸をはれ。」
みんな空をあおぐ。美しい音樂がひびく。

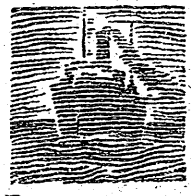
五　心に太陽をもて

心に太陽をもて

心に太陽をもて、
あらしがふこうが、雪がふろうが。
天には雲、
地にはあらそいがたえなかろうが、
心に太陽をもて。
そうすりゃ、なにがこようと、平
氣じゃないか。
どんな暗い日だって、

それが明かるくしてくれる。
くちびるに歌をもて、
ほがらかな調子で。
日々の苦労に、
よし心配がたえなくとも、
くちびるに歌をもて。
そうすりゃ、なにがこようと、平
氣じゃないか。
どんなさびしい日だって、
それが元氣にしてくれる。

他人のためにもことばをもて、
なやみ、苦しんでいる他人のためにも。
そうして、なんでこんなにほがらかでいられるのか、
それを、こう話してやるのだ。
くちびるに歌をもて、
勇氣を失うな。
心に太陽をもて、
そうすりゃ、なんだってふっとんでしまう。



くちびるに歌をもて

スコットランドの西岸のおきあいで、ローマン号という小さな汽船が、十ばいもある定期船につ

きあたって、ちんぼつしてしまいました。千九百二十年十月の、ある月のない夜のことです。乗っていた百四人のうち、乗組員十一人、船客十四人のゆくえがわからなくなりました。

アイリッシュ・ナショナル保険会社の社員、フランク・マッケンナも、しずんでいく船からほうりだされて、黒い波の間をおよいでいました。助け船は、いったい、なにをしているのだろう。かれは、氣が氣ではありませんでした。

助けを求めてなきさけぶ声も、いつか聞えなくなりました。すべてのものが、ことごとく波にのまれてしまったように、死のしずけさがあたりに廣がりました。すると、そのきみのわるいしずけさの中から、とつぜん、まったく思いがけなく、きれいな歌が流れてきました。それは女の声で、しかも、調子もみ

だれていなければ、ふるえてもいません。まるで、大ぜいの来客を前にして、客間で歌っているのと、ちっともちがわないような歌いかたです。

マッケンナは、しばらくしんみりした氣持で、この歌に聞きほれていました。かれは、いままでにどれだけ歌を聞いたかしれませんが、このときぐらい、しみじみと歌のありがたさを味わったことはありませんでした。なんだか、すうっといい氣持になって、自分が水の中にひたっていることも、わすれてしまったほどでした。寒さも、つかれも、どこかへけしとんでしまって、すっかり、よみがえったよ

うな氣持になりました。

歌っている人は、どういう人かわかりませんが、おそらくは、自分と同じように、船からなげだされたものでしょう。たいていの人は、しょうとつのときにあわてふためいて、そのために、かえって波にのまれてしまったのに、こんなきけんのせまった中で、なんというおちついた、またなんというほがらかな人だろう。自分なんか、およいでい

るだけがせいぜいなのに、こんな暗い夜、こんな海のまん中で、よくあんな美しい声がだせるものだと思いました。そうして、自分もどうせ助からないものなら、こういう美しい歌に送られて、死んでいきたいものだと思いました。

かれは、歌の声をたよりに、その方におよいで行きました。

近づいてみると、船がしずむひょうしに流れ出たものらしい一本の大きなまるたに、なん人かの婦人がつかまって、立ちおよぎをしていました。歌を歌っているのは、その中のひとりでした。

まだわかいおじょうさんです。頭から大波をかぶっても、平氣で歌を続けていました。助け船のくるのを待つ間、ほかの婦人たちが力をおとさないように、寒さに氣を失って、まるだか

ら手をはなさないように、こうして元氣をつけていたのです。

「心に太陽をもて、
くちびるに歌をもて」。

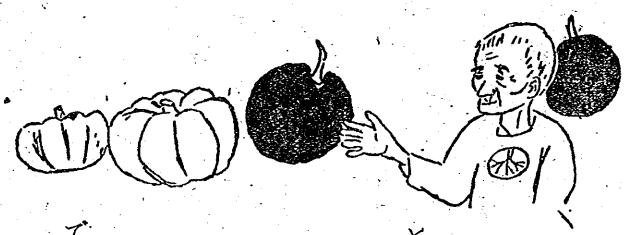
このおじょうさんは、この歌を知っていたかどうか知りません。しかし、このおじょうさんくらい、この歌の心を生かした人は少ないでしょう。このおじょうさんこそ、ほんとうにこの歌を歌った人というべきです。

さて、おじょうさんの歌をた

よりに、マッケンナがおよいで行ったように、やがて、一そうのボートが、やみをぬって助けにきてくれました。やはり、その美しい声を手がかりにして。

そうして、マッケンナも、その歌を歌っていたおじょうさんも、そのほかの婦人たちも、みんなすくいあげられました。

このことは、あくる日の新聞に出たマッケンナの話で、あきらかになったのですが、おしいことに、歌を歌ったおじょうさんの名まえがわかりません。しかし、たとい、名まえはわからなくても、あの美しい歌は、いまも、われわれの耳にひびいてくるように感じられるではありませんか。



六　とりいれまつりの夜

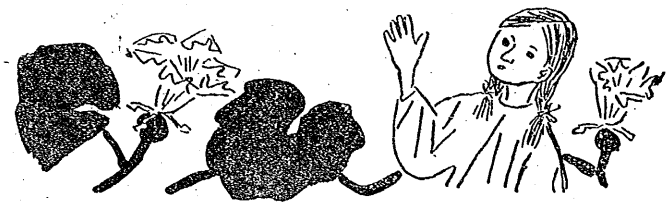
ある家の、かぼちゃのとりいれまつりの晩のことでした。

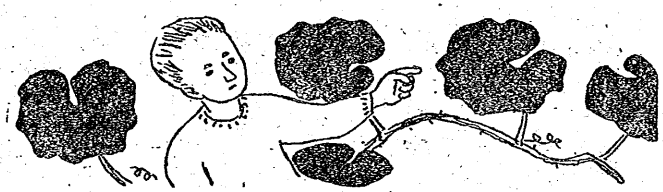
「ひさしぶりにごちそうをたべて、たいへんゆかいです。それで、よきょうに、『このかぼちゃはだれのものか』という話しあいをやってみたら、おもしろいだろうと思います。」

こういいだしたのは、根のしるしをつけた老人でした。

「賛成、賛成。」

「では、花さんからおはじめなさい。」
花は、美しいわかい女でした。
「それでは、座長の根さんのご指名で、私から申します。もちろん、このかぼちゃは私のものです。私の花がさかなかったら、実はつきません。根や、つるや、葉のないかぼちゃはありませんが、それだけでは実はつきません。花、とりわけ、め花がさいて、はじめて、かぼちゃの実がつくのです。こんな、十キロもあるような大きなかぼちゃでも、それは、花の一部であるめしべの根もとが、大きくふくれただけのものです。だから、それは、私た





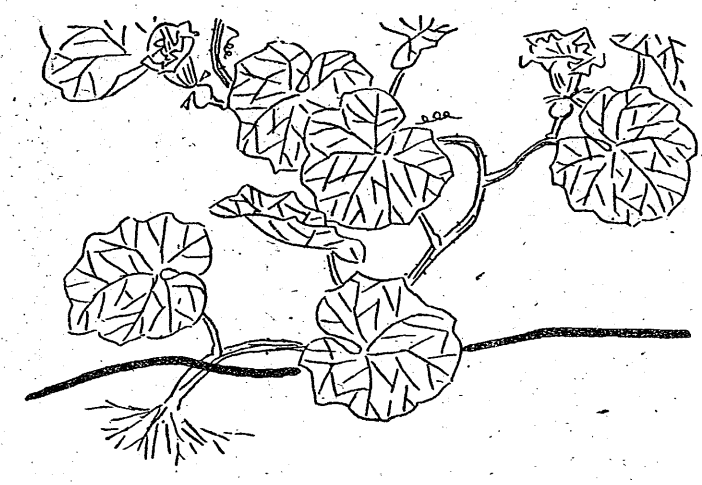
ち花のものだということはうたがいありません。」
「こんどは、葉さん、いってごらんなさい。」
葉は、元氣のいい青年でした。
「花さんは、たいへんじょうずに自分のことを主張なさいましたね。しかし、どうしてそのめしべの根もとがふくれて、そんな大きな実になったかということは、ごぞんじないようですね。それは、私が、いつも日あたりのいいところに出て、じりじりと暑い日に照らされながら、せっせと養分をこしらえて、送ってあげたからですよ。私は、せっかく花が開いても、とちゅうから、黄色くなって落ちてしまったたくさんのか

ぼちゃの花を見ています。あれは、私たちの養分をこしらえる力をかまわずに、あなたがたが、かってに花をさかせたからですよ。だから、このかぼちゃは、全部私のものだと思います」。

「では、つるさん、どうぞ」。

「いや、どうか根さんから」。

「では、おさきに申します。さっき、葉さんは養分のことをおっしゃいましたが、それは、大部分、根の私が、土の中から吸いとって、送ってあげたものです。みなさんのように、明かるい地の上でくらしているかたには、土の中のことはわからないでしょう。そこは、暗いところで、土もかたいし、石ころなども、ごろごろしています。そこへ細い根をのばして、



水と養分とを吸いとって、夜も晝も送ってあげるのは、たいへんなほねおりです。だから、私は、やっぱりそのかぼちゃは、私のものだと思います」。

「ほかに、だれもいませんから、私が申します」。

おとなのつるは、しずかにいいました。

「私は、こんなに長いばかりで、花さんや、葉さんや、根さん

のような、特別なはたらきは、なに一つございません。しかし、根さんが、せっかく吸ってくださった地の中の水や養分でも、葉さんが、それを日の光にあてたり、空氣をお吸いになって、養分におこしらえになったものでも、私が運んであげなかったら、りっぱなかぼちゃの実にはなりません。また、花さんでも、葉さんでも、日のあたるところや、高いところがおすきなようですが、そこへつれて行ってあげるのは、この私です。もし、つるの私がとちゅうで切れたりしたら、それについている葉でも、花でも、なりかけている実でも、みんなかれて、くさってしまいます。

ごらんなさい、私のこの足を、手を。こんなに大きなきずができていますが、私は、いっしょうけんめいそれをなおして、

あなたがたがかれないようにしてあげたのです。だから、私は、そのかぼちゃは、全部私のものだと思います」。

つるがこういったとき、高い声でわらいながら、どやどやとはいってきたものがあります。それは、頭のぼうしで、日、水、土、はちたちだということがわかりました。

「あははは、いま、戸の外で聞いていると、あなたたちは、ずいぶんかってなことをいっていましたね。あなたがたは、自分のことしか考えないようですが、もし、私、つまり太陽がなかったら、どうなると思います。

いったい、かぼちゃは熱帯地方のものです。それがこの日本でできるためには、私が熱と光とをゆたかに送ってやった

からです。さっき、葉さんや根さんは、養分のことをいっていらっしゃいましたが、それを養分につくるのは、葉さんではなくて、私ですよ。そういうことを考えてみたことがありますか。」

水が続いていいました。

「生きものに、いちばんたいせつなものは、私たち水です。水がなかったら、なんでもすぐ、かれたり死んだりしてしまいます。この大きなかぼちゃは、ずいぶんかたいようですが、やっぱり、この大部分は水です。いまのお話の養分だって、水にとけているから、根から実まで運んでいけるのですよ。それから、空から降る雨、あれだって水ですよ。あのかわききった夏のさいちゅうに、あの雨のおかげで、かれるのが助かったことを考えてごらんなさい。」

土が、立ちました。

「ぼくは、いちばんじみなものです。しかし、土にはえていないかぼちゃなんて見たことがない。さっきから問題になっている養分だって、みんな私がわけてあげたのです。水だって、ためておいてあげたのです。ほかのことはわすれても、この土のことは、かたときもおわすれになれないでしょう。」

すると、いたずらなはちがいいました。

「花さん、あなたが、どんなに美しくさいたって、ぼくがとびまわって、かふんをなかだちしてあげなかったら、実は一つもつかなかったのです

よ。だから、あのかぼちゃは、みんなぼくのものだといってもいいのです。しかし、ぼくは、そんなよくのふかい、身がってなことはいいませんよ。あなたがたは、どうして地面にはえたのか、考えたことがありますか。」

花も、葉も、つるも、首をひねって考えていました。しばらくして、根がいいました。

「ああ、やっと思いだした。人

間が來て、まいてくれたのだった。もし、あの人間がいなかったら、また、その人間がせわをしてくれなかったら、私たちは、はえもしなければ、大きくもならなかったかもしれない。」

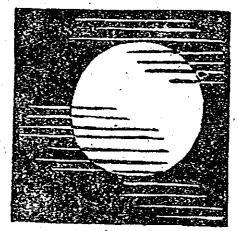
つるも、うなずいて、

「そうです。このかぼちゃは、だれのものとも、簡單にはいえませんね。公平にいって、みんなのものです。しかし、いちばんいい種を、來年もわすれずにまいてもらうことができさえすれば、このかぼちゃは、お礼に、すっかり人間にあげてしまっても、さしつかえないと思いますが、どうでしょうか。」

「同感。同感。」

と、日や、土や、水などがいいました。花も、葉も、根も、みんな賛成しました。

七　茶わんの湯



ここに、茶わんが一つあります。中には、熱い湯がいっぱいはいっております。ただそれだけでは、なんのおもしろみもなく、ふしぎもないようですが、よく氣をつけて見ていると、だんだんに、いろいろのこまかいことが目につき、さまざまのうたがいがおこってくるはずです。ただ一ぱいのこの湯でも、自然の現象を観察し、研究することのすきな人には、なかなかおもしろい見ものです。

第一に、湯の表面からは、白い湯げがたっています。これは、

いうまでもなく、熱い水蒸氣がひえて、小さなしずくになったのが、無数にむらがっているので、ちょうど雲やきりと同じようなものです。この茶わんをえんがわの日なたへ持ちだして、日光を湯げにあて、向こうがわに黒いぬのでもおいてすかして見ると、しずくのつぶの大きいのが、ちらちらと目に見えます。ばあいにより、つぶがあまり大きくないときには、日光にすかして見ると、湯げの中に、にじのような、赤や青の色がついています。これは、白いうす雲が月にかかったときに見えるのと、にたようなものです。この色については、お話することがどっさりありますが、それは、また、いつかべつのときにしましょう。

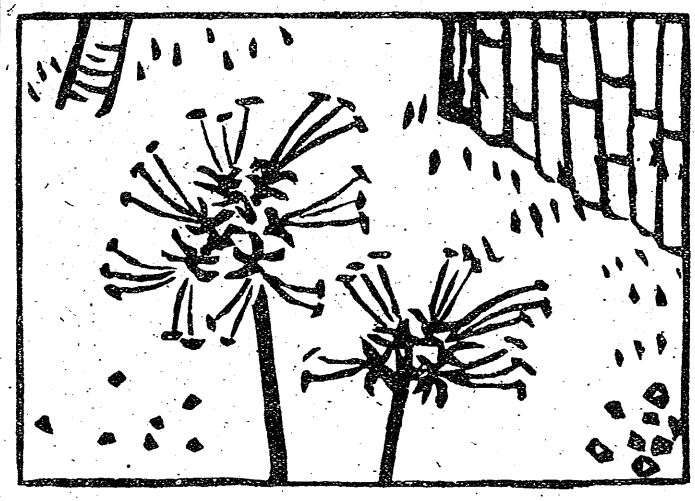
すべて、まったくとう明なガス体の蒸氣が、しずくになると

きには、かならず、なにか、そのしずくのしんになるものがあって、そのまわりに、蒸氣がこってくっつくので、もし、そういうしんがなかったら、きりは、たやすくできないということが、学者の研究でわかってきました。そのしんになるものは、ふつうけんび鏡でも見えないほどの、たいへんこまかいちりのようなものです。空氣中には、それが、しぜんにたくさんういているのです。空中にうかんでいた雲が消えてしまったあとには、いまいった、ちりのようなものばかりがのこっていて、飛行機などで、横からすかして見ると、ちょうど、けむりが廣がっているように見えるそうです。

茶わんからあがる湯げをよく見ると、湯が熱いかぬるいかが、おおよそわかります。しめきったへやで、人の動きまわらない

ときだと、ことによくわかります。熱い湯ですと、湯げの温度が高くて、まわりの空氣にくらべてずっとかるいために、どんどんとさかんにたちのぼります。反対に、湯がぬるいと、いきおいがよわいわけです。湯の温度を計る寒暖計があるなら、いろいろ自分でためしてみると、おもしろいでしょう。もちろん、これは、まわりの空氣の温度によってもちがいますが、おおよそのけんとうは、わかるだろうと思います。

つぎに、湯げがのぼるときには、いろいろのうずができます。これがまた、よく見ていると、なかなかおもしろいものです。せんこうのけむりでもなんでも、けむりの出るところからいくらかの高さまでは、まっすぐにあがりますが、それ以上は、け



むりがゆらゆらして、いくつものうずになり、それがだんだんに廣がり、入りみだれて、しまいに見えなくなってしまいます。茶わんの湯げなどのばあいだと、もう、茶わんのすぐ上から大きなうずがでてきて、それが、かなり早くまわりながら、のぼっていきます。

これとよくにたうずで、もっと大きなのが、庭の上などにできることがあります。春さきな

どの、ぽかぽかあたたかい日には、前日雨でも降って、土のしめっているところへ日光があたって、そこから白い湯げがたつことがよくあります。そういうときに、よく氣をつけて見ていてごらんなさい。湯げは、えんの下やかきねのすきまから、つめたい風がふきこむたびに、横になびいては、また、たちのぼります。そうして、大きなうずができ、それが、ちょうどたつまきのようなものになって、地面からなんメートルもある、高い柱の形になり、たいへんな早さで回轉するのを見ることがあるでしょう。

茶わんの上や、庭さきでおこるうずのようなもので、もっと大じかけなものがあります。それは、らい雨のときに、空中におこっている大きなうずです。陸地の上のどこかの一地方が、

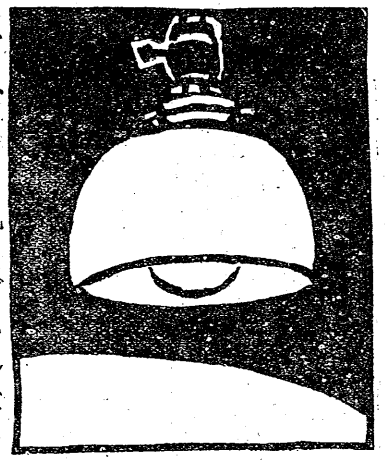
日光のために、特別にあたためられると、そこだけは、地面から蒸発する水蒸氣が、とくに多くなります。そういう地方のまわりに、わりあいにつめたい空氣におおわれた地方があると、あたたかい空氣がのぼっていくあとへ、入れかわりに、そのつめたい空氣が下からふきこんできて、大きなうずができます。そうして、ひょうが降ったり、かみなりが鳴ったりします。

これは、茶わんのばあいにくらべると、しくみがずっと大きくて、うずの高さも、四キロとか八キロとかいうのですから、そういう、いろいろなかわったことがおこるのです。しかしまた、見かたによっては、茶わんの湯と、こうしたらい雨のばあいとは、よほどよくにたものと思ってさしつかえありません。

もっとも、らい雨のできかたは、いまいったようなばあいばかりでなく、だいぶようすのちがったのもあります。だから、どれもこれもみんな、茶わんの湯にくらべるのはむりですが、ただ、ちょっと見ただけでは、まったく関係のないようなことがらが、原理のうえからは、おたがいによくにたものであるという一つの例に、らい雨をあげてみたのです。

湯げのお話はこのくらいにして、こんどは、湯のほうを見ることにしましょう。

白い茶わんにはいっている湯は、日かげで見ては、べつにかわったようすはなにもありませんが、それを日なたへ持ちだして、じかに日光をあて、茶わんのそこをよく見てごらんなさい。そこには、みょうなゆらゆらした光った線や、うす暗い線が、



不規則なもようのようになって、ゆるやかに動いているのに氣がつくでしょう。これは、夜、電燈の光をあてて見ると、もっとよく、あざやかに見えます。夕ごはんのおぜんの上でもやれますから、よく見てごらんなさい。それも、お湯が熱いほど、もようがはっきりします。

つぎに、茶わんのお湯がだんだんにひえるのは、湯の表面の茶わんのまわりから、熱がにげるためだと思っていいのです。もし、表面にちゃんとふたでもしておけば、ひやされるのは、おもに、まわりの茶わんにふれた部分だけになります。そうな

ると、茶わんに接したところでは、湯は、ひえて重くなり、下の方へ流れて、そこの方へ向かって動きます。その反対に、茶わんのまん中の方では、ぎゃくに上の方へのぼって、表面から外がわに向かって流れます。だいたい、そういうふうなじゅんかんがおこります。よく理科の本などにある、ビーカーのそこをアルコールランプで熱したときの水の流れと、同じようなものになるわけです。これは、湯の中にうかんでいる小さな糸くずなどの動くのを見ていても、いくらかわかるはずです。

しかし、茶わんの湯を、ふたをしないでおいたばあいには、湯は表面からもひえます。そうして、そのひえかたがどこも同じではないので、ところどころ特別につめたいむらができます。そういう部分からは、ひえた水が下へおり、そのまわりの、わ

りあいに熱い表面の水が、そのあとへ向かって流れ、それが、おりた水のあとへとどくじぶんにはひえて、そこからおります。こんなふうにして、湯の表面には、水のおりているところと、のぼっているところとがほうぼうにできます。したがって、湯の、中までも熱いところと、わりあいにぬるいところとが、いろいろに入りみだれてできてきます。これに日光をあてると、熱いところとつめたいところとのさかいで、光が曲がるために、その光が同じようにならず、むらになって、茶わんのそこを照らします。そのために、さきにいったようなもようが見えるのです。

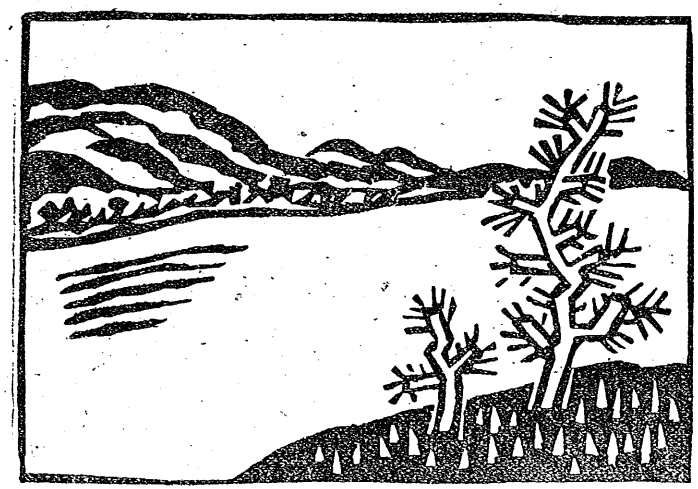
日のあたっているかべや屋根をすかして見ると、ちらちらしたものが見えることがあります。あの「かげろう」がたつのは、か

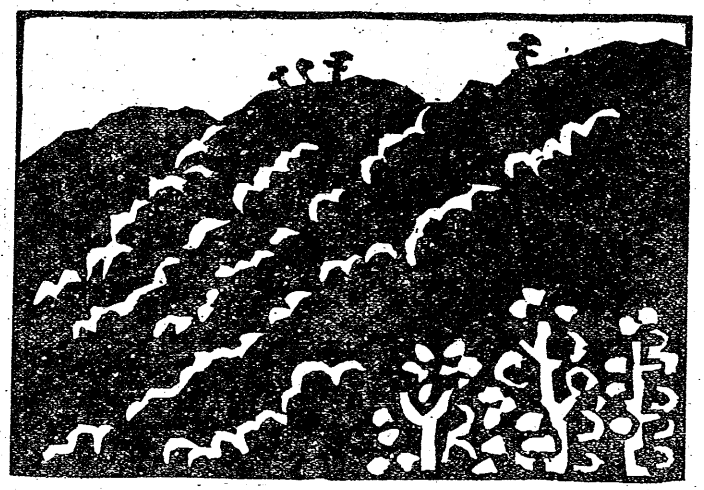
べや屋根が熱せられると、それに接した空氣がふくれてのぼる、そのときできる氣流のむらが、光をおり曲げるためなのです。

つぎには、熱い茶わんの湯の表面を、日光にすかして見ると、湯のおもてに、にじの色のついた、きりのようなものがひと皮かぶさっており、それが、ちょうどさけめのようにたて横にやぶれて、そこだけがとう明に見えます。このふしぎなもようがなんであるかということは、まだ、あまりよくわかっていないようです。しかし、それも、前の溫度のむらとなにか関係があることだけはたしかでしょう。

湯がひえるときにできる、熱さとつめたさとのむらが、どうなるかということは、ただ、茶わんのときだけの問題ではなく、たとえば、湖や海の水が、冬になって、表面からひえていくときには、どんな流れがおこるかというようなことにも関係してきます。そうなると、いろいろの実用上の問題とえんがつながってきます。

地面の空氣が、日光のために





あたためられてできるときのむらは、飛行家にとって、たいへんあぶないものです。とっ風というものがそれです。たとえば、森と畑とのさかいのようなところですと、畑のほうが、森よりも、日光のためによけいあたためられるので、畑では空氣がのぼり、森ではくだっています。それで、畑の上からとんできて、森の上へかかると、飛行機は、しぜんと下の方へおしおろされるかた

むきがあります。これがあまりはげしくなると、きけんになるのです。これと同じような氣流のじゅんかんが、もっと大じかけに、陸地と海との間に行われております。それは、海陸風とよばれているもので、晝間は海から陸へ、夜は反対に陸から海へどふきます。すこし高いところでは、反対の風がふいています。

これと同じようなことが、山腹と谷との間にあって、山谷風と名づけられています。これが、もうひとまわり大じかけになって、たとえば、アジア大陸と太平洋との間におこると、それがいわゆる季節風(モンスーン)で、われわれが冬期に受ける北西の風と、夏季の南がかった風になるのです。

茶わんの湯のお話は、すればまだいくらでもありますが、ここでは、これくらいにしておきましょう。

八　木もと竹うら

(一)

私が、木を割ったり、竹を割ったりして、なにかこしらえようとしていると、祖父が來て、「木もと竹うら」ということわざを教えてくれました。

この簡單なことわざは、木を割るときには、もとのほうから割るがいい、竹を割るときには、うらのほうから割るがいいという教えでした。

私はすぐにこれをためしてみましたが、ほんとうにそのとおりでした。竹を割るとき、もとのほうから割ろうとすると、た

とい、はじめにまん中になたをいれても、きっと、とちゅうから横の方へそれてしまって、一方は太く、一方は細くなって、まっすぐに割ることができなかったのに、うらのほう、いいかえると、竹の先のほうから割ってみると、もとまで、きれいにまっすぐに割ることができました。そののち、氣をつけて、おけ屋さんなどのやっているところを見ると、はじめ、うらのほうをかるく四

つに割って、あとは、十文字の小さな木ぎれをはさんで、チョンチョンとたたいて、みごとに割っていました。

木のほうは、これと反対に、もとのほうを上にして、上からはものをうちこむと、まっすぐに割れて、けっしてそれることがありません。ただ、困るのは、木のばあいには、どっちがうらかもとか、わからないことでした。

そのことを友だちに話すと、

「水になげこんでごらん。しずむほうがもとだよ。」

と教えてくれました。

「木もと竹うら」という簡單なことを、知っているのといないのでは、たいへんちがいます。これは、ちょうど、「二二が四」という算数の九九と、にたようなものだと思いました。

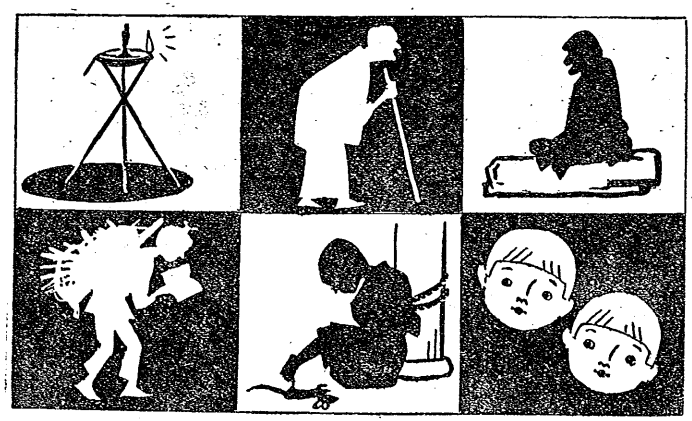
いったい、だれが、そのことを発見したのでしょうか。ことによると、なん百年という前からつくられて、子に、まごにと傳えたことではないかと思います。または、自分たちの祖先が発見したのではなく、よその民族から教えられて、それからいい傳えられているのもあるかもしれません。

それは、なん回もなん回も、あるいは、なん代もなん代もやってみた結果、とうとう一つの眞理だと思われたので、そのことをほかの人々に傳えるうちに、あのような、短くて調子のいい、氣のきいたものになったものとも考えられます。

（二）

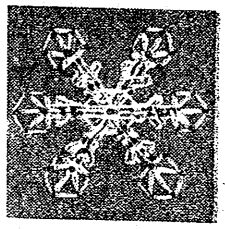
あぶはちとらず。

石の上にも三年。
一事が万事
牛を追う。
うり二つ。
おびに短し、たすきに長し。
かべに耳あり。
ころばぬさきのつえ。
さるも木から落ちる。
親しきなかにも礼儀あり。
しゅにまじわれば赤くなる。
十人十色。
すきこそもののじょうずなれ。



たまみがかざれば光なし。
ちりもつもれば山となる。
燈台もと暗し。
どんぐりのせいくらべ。
なくてセくせ。
二階から目ぐすり。
ぬかにくぎ。
ぼろを着ても心はにしき。
まかぬ種ははえぬ。
三つ子のたましい百まで。
世の中は、三日見ぬまのさくらかな。

九　雪の映画

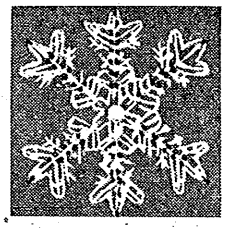


雪の映画を二つ見た。一つは「雪國」というのであり、もう一つは「雪」というのであった。

「雪國」は、北國の人たちが雪と戰っているようすを、映画にしたものである。雪が降りだしてから、だんだんつもるようす、深い雪の中で生活している人々、春の光がさしそめて、雪どけ水が流れだすところ、それをうれしそうに見ている雪國の子どもなど、時間的に、じゅんじょをおって、とりあつかったものである。

「雪」というのは、雪の景色を写したものではなく、雪の一ひら

をとらえて映画にしたものである。ただ一ひらの雪ではあるが、よく見ると、まことにきれいな形をしていること、しかも、一ひら一ひらの雪が、それぞれちがったけっしょうをしていること、その美しい雪が数かぎりなく、天上から地上へ降ってくることなどを写している。



また、どうして雪のけっしょうができるか、どんなばあいに、どのようなけっしょうになるか、空中の温度の変化、風の関係、水蒸氣の量、高度など、さまざまな條件によって、雪のけっしょうがちがうわけを、映画的手法によって、よくわかるようにしくんだものであった。

空から降ってきた雪の一ひらを受けとって、それをくわしく

観察してみると、その雪が、どこで、どのようにしてできたか、どんな天空を旅して降ってきたか、おのずから知ることができるというのである。

「雪は、空からのお手紙です」。

こんなことばによって、映画は私たちに説明してくれた。一ひらの雪によって、はるかに高い天空のようすが、こまごまとわかるとすれば、たしかに空からの手紙にちがいない。「空からのお手紙」とは、うまくいったものだ。

このように、二つの映画は、どちらも雪にえんのあるものであるが、私はあとのほうの映画に心をひかれた。ふんだんに降ってくる雪の中から、一ひらの雪をとらえて、それをいろい

ろな角度からながめてみることは、つつましい心なしにはできるものではない。野原の中で、一本の草花を見いだして、それをたんねんに写生するのも、一びきのこん虫をながねんかかって調べるのも、ごくささいな感情をひろいあげて、一首の歌をよむのも、同じ心の現われであろう。

「雪國」の映画も、けっしてわるいものとは思わないが、いますこしふかく考えれば、さらにおもしろい場面が発見されるように思われる。たとえば、ふぶきなどもその一つである。風におられた雪のむれが、道を消し、木をおり、汽車を立ちおうじょうさせ、人をたおし、こごえ死にさせてしまうことすらある。このものすごいありさまを映画化することは、たやすいことではあるまいが、ばんそうの音楽や、場面の組みあわせと説明の

ことばなどによって、かなり生き生きと表現することができそうである。

ふぶきのやんだあとの、雪の野原の表情をあつかっても、おもしろいと思う。一面の銀世界となった廣い野原を、第一の人が歩いて行く。その人の足あとをしるべに、第二の人が歩いて行く。やがて第三の人も通り、第四、第五の人も、同じ足あとをたよりに通って行く。ぼつりぽ

つりとしるした足あとが、廣野を横ぎる一すじの道となる。その一すじの道をながめると、一直線ではなく、くねくねとゆがんでいる。歩く人は、おそらく、まっすぐに歩こうと思ったのであろうが、いつのまにか曲がってしまう。どうしてこんなに曲がるのか。風にふかれたからであろうか。足がつめたくなって、立ちどまったためであろうか。それとも、心の中で考えごとをしていて、思わず方向がちがったものであろうか。

雪國でいちばん楽しいものは、なんといっても、春さきの雪どけごろである。半年も雪にとざされていた地上に、ぽちっと黒

い土が見えはじめたときの喜びは、たとえようがない。子どもたちは、この黒い土の上に集まって、足でトントンとふんでみたり、しゃがんで土のにおいをかいだり、てのひらでなでてみたり、耳を地べたに近づけて、なにかもの音でも聞こうとしたりする。こんな場面を、映画独特の手法によって、おもしろく編集できないだろうか。

同じ題の作文でも、それをとりあつかう人によって、文章は、どのようにも書きあらわされる。

どのような文章でも、読む人の心がひかれるのは、ものごとをあたたかくながめた人によって書かれた文である。

十　マッチ賣りのむすめ

雪はひっきりなしに降ってくる。寒いことも寒いが、また暗さも暗かった。

「なんと暗い、寒い夜だろう」。

と、小さなマッチ賣りの女の子は、町をあちらこちら歩きながら思った。

女の子は、つめたい屋根うらのへやを出たときは、上ぐつを足にひっかけていた。その上ぐつは、母親のものだったので、この子にとっては大きすぎた。二台の荷馬車が來たので、それをさけるために、急いで道を横ぎったときに、その上ぐつはぬ

げてしまった。かたほうはどこへいったか、つい見いだせなかった。もう一つのほうは、どこかの男の子がひろって行ってしまった。その男の子は、これは人形のゆりかごにはもってこいだと思ったのであろう。

そこで、その女の子は、まったくはだしになってしまった。だから、その足のつめたいことといったらなかった。自分の足だか、ひとの足だか、わからな

いくらいだった。寒さがしみこんで、足は赤く、青くなっていた。

おおみそかの晩だというのに、その子は、まだマッチをすこしも賣ってはいなかった。一はこも賣ってはいなかった。思いきって、その屋根うらの家へ帰ることもできなかった。まだ一銭ももうけてはいないので、父親が、きっとひどくしかるにきまっていた。

かわいそうに、その子は、おなかがすいて、こごえて、身をひきずって歩いていた。

その子のきれいなかみの毛は、両かたにまつわりつき、雪は、そのかなしげな、小さな顔のまわりを、花かんむりのようにくまどった。けれども、その小さなマッチ賣りのむすめは、自分のまき毛のことも、雪のことも考えなかった。美しく火のともった家々の前を、そろそろとかなしげに通って行きながら、その小さなマッチ賣りのむすめの考えたことはそれであった。

女の子は、窓々をとおして、ちらちらとかがやくともしびの光を見た。おいしそうなにおいをかいだ。「あれはやき鳥だろうか」ひもじいので、そんなことを思った。ただひと目でも、火の光とごちそうとを見るだけでも、満足したであろう。

女の子は、手にマッチの小さなたばを一つ持っていた。ぼろぼろの前だれの中には、もっとたくさんはいっていた。女の子

は、どんなにか、それで火をともしてみたかったことだろう。

女の子は、二つの家の間に、ちょっとした、身をかくす場所を見つけた。そうして、そこにすわりこんだ。女の子は、両足を――そのあわれな、小さな、赤く、青くなった両足をそろえて、ぼろぼろの着物の下で重ねて、どうかして、あたためようとした。けれどもだめであった。

両手もまた、寒さでほとんどこごえていた。その両手をあたためるために、一本のマッチで――ほんのたった一本のマッチで、火をともすことができたならば、どんなによかろうか。

女の子は一本のマッチをとりだした。かべにこすりつけて、火をつけた。まあ、なんというれしいことだろう。明かるい、赤いほのおがかがやきだした。女の子は、その上へ、小さなつめたい両手をさしのべた。

その小さなほのおが、その子には、もえさかる大きなほのおのように思われた。これは、ま法のマッチだろうかとさえ思った。

それば かりではない。それがもえ続けている間、大きなろの前にすわっていた。そのろの中には、美しい火がもえあがり、ほのおは、その小さなマッチ賣

りのむすめを喜びむかえるようにおどりあがった。
女の子は、小さな、つめたい足を、かがやくほのおの方へのばした。と思うと、そのとき、ほのおは消えてしまい、ろはなくなってしまった。女の子は、手にもえつくしたマッチを持って、つめたく、いん氣そうにすわっていた。女の子は、またそうしないではいられなくなって、もう一本のマッチをとってかべでこすった。
それがゆらゆらともえあがると、まあ、なんというふしぎなことだろう。その火の光のさすところは、かべがきぬのようにうすくなって、その女の子は、中のへやをすっかり見とおすことができた。
雪のようにまっ白なぬのをかけ、ぴかぴか光るさらをならべ

たテーブルが見えた。やいた鳥が——それこそほんとうのまるやきの鳥が、ほかほかとあたたかいいきをたてて、テーブルの一方におかれてあった。
そのとき、まあ、どうだろう。そのやいた鳥は、肉を切るナイフとホークとをせなかに立てたまま、テーブルからとびおりて、ゆかの上をよたよた歩いて、その女の子の方へずっとよってくるではないか。ああ、そのときもとき、ちょうどマッチはもえつくしてしまって、女の子のそばには、あつい、かたいかべしかのこっていなかった。
女の子は、もう一本の、第三番めのマッチをすった。ほのおが明かるくもえあがった。そうして、こんどは、女の子は、一本のクリスマスの木の下にすわっていた。いかにも大きな木で、

それが美しくかざられていた。
たくさんの小さなろうそくが、みどりの枝の間からかがやいて、ちかちか、ちかちかと女の子の上を照らし、いく百もの小さな人形が見おろして、マッチ売りのむすめを見てわらいかけた。
女の子は、人形の方へ両手をさしのべた。と、そのとき、マッチはもえつくしてしまった。
けれども、やっぱり、そのたくさんのろうそくはもえ続けていて、それが、高く、高く、しだいにのぼって、大空の星のようにかがやくのを見た。たしかにそれは星であった。
「かがやく小さな星よ、おまえはいったいなんだろうか。」

女の子はねむそうにつぶやいた。
じっと見つめているうちに、一つの明かるい星が落ちるのを見た。その星が落ちるとき、空を横ぎって長い光のおをひいた。
「なにかが、神さまのところへ行くのだ。」と、女の子は思った。
この子にとって、ただひとりのしんせつな人であったおばあさんが、星の落ちるときは、なにかのたましいが神さまのところへのぼっていくのだと、話してきかせたことがあった。
女の子は、またもう一本のマッチを、そばのたばの中からひきだした。そのマッチの火の中で、もうどっくにわかれて神さまの

おそばへ行ったおばあさんを見た。おばあさんは、いつものように、やさしく、しんせつなようすをしていた。けれども、前よりはもっと楽しそうなようすをしていた。

「おばあちゃん、わたしのおばあちゃん。もう行っちゃいや。」

と、女の子は、声をあげた。そうして、おばあさんが見えなくなっては困ると思ったので、急いで、たばの中にあったマッチをみんな一時につけた。

「いっしょにつれて行ってください。ねえ、いっしょにつれて行ってください。」

と、女の子はいっしょうけんめいにたのんだ。

マッチは、はなやかにもえあがった。まっ晝間でも、それ以上に明かるくはないと思われるくらいであった。

おばあさんが、こんなにせいが高く、りっぱで、美しく、そうして、しんせつに見えたことは、いままでなかったことであった。

おばあさんは、女の子をうでにかかえて、ふたりは、いっしょにふわりとまいあがった。うれしそうに、楽しそうに、上の方へ、地面から高くはなれて、むう、寒さも、ひもじさも、なみだもない國へ、上の方へと、

神さまのおそばへ行くかのようにのぼって行った。

小雪の降った元日の朝、人々が、マッチ貴りのむすめの、ひえきった小さなながらを見つけたとき、

「かわいそうな子だ。あの子は寒さでこごえ死んだのだ」

といった。けれども、そうではなかった。人々は、女の子がおおみそかの晩に見たふしぎなまぼろしを知らないのだ。人々は、その子がどんなに幸福に、神さまの樂園の中で、元日をむかえているかを知らないのだ。

純(5)　直(5)　修(5)　職(5)　英(18)　交(24)　辞(28)

典(28)　宗(32)　哲(32)　系(33)　博(34)　士(34)　億(34)

引(35)　保(45)　険(45)　張(53)　帯(57)　湯(62)　象(62)

蒸(63)　規(70)　接(71)　割(77)　儀(81)　映(83)　変(84)

量(84)　條(84)　件(84)　独(89)　編(89)

K160.8-1-14

國語 六学年 中

Approved by Ministry of Education
(Date Sep. 6. 1947)

昭和二十二年九月六日 繰刻印刷
昭和二十二年九月二十日 繰刻發行
(昭和二十二年九月六日 文部省檢査濟)

著作權所有 著作兼發行者 文部省

東京都北區堀船町一丁目八五七番地
繰刻發行兼印刷者 東京書籍株式會社
代表者 井上源之丞
東京都北區堀船町一丁目八五七番地
印刷所 東京書籍株式會社
東京都北區堀船町一丁目八五七番地
發行所 東京書籍株式會社

1983年度
購入 文生書院

文部省著作教科書

國語

第六学年 下

K160.8
1
15

15